

主 題：良き社会人であれ
 聖書箇所：ローマ人への手紙 13章1-7節

「良き社会人であること」、「良き国民であること」、これが今日のテーマです。この13章から、パウロの話のテーマが大きく変わったという人がいます。確かに、12章では「人との関わりに関する教え」が与えられていました。そして、13章からは「人と権力との関係」についてのパウロの教えが記されています。だから、ある人たちはテーマが変わったと言うのです。その答えは「NO」です。テーマは変わっていません。確かに、12：3からパウロは、救われた者として私たちは教会においてどのように生きて行くのか、兄弟姉妹との関係において私たちはどのように生きて行くのか、すべての人に対して、また、敵に対してどのように生きて行くのかを教えてくださいました。彼が言わんとしたことは、救われた者として、その感謝をどのように日々の生活において具体的に現わしてゆくのかということです。パウロはそのことを教えようとしたのです。だから、彼はこのような生き方を「霊的な礼拝」と呼んでいます。12章の1節を見たときこのように教えました。「…あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」と。パウロがここで教えようとしたことは、自らのすべてを主にささげることです。つまり、これまでの自分の考えに従って生きて来た人生、自分の思い通りに生きる生き方を放棄して、主のみこころに沿って生きることへの新たな決心です。それが礼拝者としてのあるべき生き方だとパウロは教えたのです。そうして、主に喜んでいただくだけでなく、主のすばらしさを証するという、私たちが生かされている本来の目的に沿って生きて行くのです。だから、どのように生きて行くのかを具体的にこのみことばに記しているのです。主によって救われた者として、これまでの自分中心の生き方から、生まれ変わった者として、真の神を心から礼拝する者として、私たちはどのように日々歩んで行くべきなのか、そのことをパウロは12：3から記して、私たちに大切な教えを与えてくれたのです。

12章の中では、先ほども言ったように、人との関わりにおいて私たちはどのように生きて行くべきかを、そして、13章からは、権威に対する生き方、権威に対する主のみこころに沿った生き方を教えようとするのです。パウロは私たちはどのようにこの権威と向き合っていくべきなのかを具体的に教えようとしています。だから、12章も13章を見てもパウロのテーマは変わっていません。救われた者として、救いを感謝する者として、具体的にどのように生きて行くのか、パウロはそのことを教え続けているのです。

☆二つの命令

さて、私たちは今、13：1-7を見て行くのですが、二つの命令にぜひ注意してください。一つは1節に「上に立つ権威に従うべきです。」とありますが、この「従うべき」です。二つ目の命令は7節にあります。「だれにでも義務を果たしなさい。」の「果たしなさい」です。これがパウロが教えようとしたことです。これが彼が私たちに勧める生き方です。一つずつ見て行きましょう。

A. 権威に従う 1-5節

1. この命令の意味

このことを正しく理解するためには当然、パウロが言わんとしている意味を正しく理解することが必要です。

1) 「上に立つ権威」とは？

このことばは、ルカの福音書12：11では「権力者」と訳されています。「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。」また、テトス3：1を見ると「権威者」と訳されています。「あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。」。ですから、これらを見るとこのように言えます。パウロがここで言いたかった「上に立つ権威」とは、国を治める権利と権力をもっている人たちのことです。また、公共の秩序と安全を維持するために権力を委譲されている人たちのことです。政治に携わっている人たち、また、治安を維持するために働きをしている警察官、そのような人たちのことです。私たちの上に立って、この国を治めている人たち、この町を治めている人たちのことです。パウロはその人たちに「従いなさい」と言うのです。

2) 「従う」とは？

この「従う」は面白いことばが使われています。これは軍隊用語です。兵士たちが指揮官の指示に服従する様子です。上官が命じたことを兵士たちは従順に行なってゆきます。そのことです。ですから、

パウロが言うことは、自ら進んで、自らの意志をもって服従しなさいということです。あなたの上に立てられている、政治を司っている人たちにあなたは自ら進んで服従して行きなさいと。

◎服従に例外はあるか？

恐らく、このメッセージ、この命令を聞いて、ある人たちは「例外があってもいいのでしょうか？」と言われるでしょう。というのは、政治家を見たときに、従える政治家とそうでない政治家がいると、確かにそのように思えるときがあります。でも、パウロが言わんとしたことはどうだったでしょう？パウロは信仰者として生きたその信仰生活において、彼自身の上に存在し、そして、治めているリーダーたちへの不満や悪口を口にしていないのでしょうか？みことばの中にそのようなことばがありますか？その逆が多いのです。たとえば、パウロたちがヨーロッパへと移動して来たときのこと。現在のトルコのイスタンブールを経てヨーロッパへと入ってゆきます。ピリピという町にやって来ました。そこに着いたとき、占いの霊につかれた一人の女奴隷に出会いました。彼女の主人はその占いを通して利益を得ていたのです。彼女がパウロの後をついてくるので、パウロは彼女から占いの霊を追い出しました。すると、もう占いをすることができなくなったので、もうけることができないと悟ったこの主人はパウロを訴え出るので、その様子が使徒の働き16章に記されています。そして、二人を、これはパウロとシラスですが、長官たちの前に引き出して様々なことを言います。16：22-23に「**群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、：23 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。**」とあります。私たちならどうでしょう？なぜ、こんな目に会うのでしょうか？この長官はなぜ私にこんな酷いことをするのでしょうか？と、もしかすると、長官に恨みをもつかもかもしれませんし、長官を非常に憎んだかかもしれません。恐らく、パウロもシラスも、そのからだから血が流れていたでしょう。大きな傷を負ったことでしょう。そのような中でパウロの口から彼らに対する不満や悪意に満ちたことばが出ていたのでしょうか？見てください。同じ箇所、25節にはこのように記されています。「**真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。**」と。彼らは不満を言うどころが、神に賛美をし感謝をささげているのです。パウロはその長官たちに対して不満をもらすことはありませんでした。このような中でも彼らがしたことは、神に対する感謝です。

また、同じ使徒の働き25章を見ると、カイザリヤにおいて、パウロがフェストによってさばかれたとき、パウロは次のように語っています。このフェストは州総督でした。パウロはフェストの前に引いて来られてさばきを受けるのです。そのときにパウロはこのように弁明します。25：8「**しかしパウロは弁明して、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪も犯してはおりません。」**と言った。」と。カイザルとはローマ皇帝、シーザーのことです。つまり、パウロがここで言ったことは「私はユダヤの律法はもちろん、宮の教えにも、また、ユダヤを支配しているローマ皇帝に対しても、何の罪も犯していない。」です。パウロはそのような法律に従順だったことを意味します。彼はそのように生きていたのです。

このようにみことばを見ても、ある人はこのように言うかもしれません。「パウロは分かっていない。私の町の政治家は問題だらけです。」と。残念なことに、そのようなことがマスコミから出て来ます。多くの皆さんはその現状を見て嘆いておられるでしょう。これからの世の中を考えて、他の国にでも住もうかと思っておられるかもしれません。不安だらけだからです。確かに、その気持は分かります。もう一度、ローマ書13章に戻ってください。

◎服従に条件はあるか？

1節にパウロはこう言っています。「**人はみな、上に立つ権威に従うべきです。**」と。このように言ったパウロは、この権威者の条件にいったい触れていないことに気がきます。その人の人格に関しても、その人の仕事ぶりに関しても、その人の支持率に関してもいったい記していません。つまり、その権威者がたとえどのような人物であっても、服従するというのが主の命令なのです。それが神のみこころであるとパウロは教えるのです。ここで私たちが頭に入れておかなければいけないことは、パウロがこの手紙を記しているときのローマ皇帝はだれだったかということです。ネロです。彼はまだ悪行を行なっていません。ご存じのように、彼はこの後、60年代にかけて大変なことを行なってゆきます。パウロは「あなたの上に立つ権威者が、どんなに酷い人でも、悪名高い権威者であっても、主があなたに命じておられることは従順であること」と言うのです。

どうしてそうなのでしょう？1節にこのように続いています。「**神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。**」と。つまり、その権威者、リーダーは神によって立てられていると言うのです。今の私たちの国の首相も、知事も市長もすべて神がお立てになったと言うのです。だから、その人に従いなさいと。この「従うこと」、従順は私たちクリスチャンの特徴だと思いませんか？神がお定めになった組織の中で、常に「従順」が教えられています。たとえば、

- ・「**家庭**」＝主に従順に生きる夫婦がいます。そして、その夫婦の模範に倣って子どもたちも主に従順に従う者へと変えられてゆきます。そのことはみことばが私たちに教えます。子どもは親に、そして、妻は夫のリーダーシップに従って行こうとするのです。夫が自分の期待通りであろうとなかろうと、それが主のみこころだから従うのです。
- ・「**教会**」＝教会に属する人たちはみな、個人的に主に従順に生きるクリスチャンであるはずで、そう願います。信仰者である一人ひとりがまず神に対して負っている責任は、主に従順に生きて行くことです。みことばに従順に従い続けて行くことです。そして、教会に存在する信仰の先輩たちは、知識やことばによってではなく、主に対するその従順な生き方によって模範を示し、その生き様に倣って新しいクリスチャンたちが従って行く、それがあべき教会の姿です。みことばはそのように教えています。

ですから、神が定められた家庭という環境を見ても、教会という環境を見ても、どちらもその特徴は従順です。夫として妻としてそれぞれの責任を果たして行くのです。主が教えてくださっている教えに、みこころに従って行くのです。子どもとしてその教えに従って行く。教会にあって、それぞれが責任を果たしてゆこうとする。主がお立てになったリーダーシップに従って行こうとする。なぜ、それが大切なのでしょう？家庭においても教会においても、あなたがそのようにみこころに従ってゆくなら、神があなたを喜んでくださるからです。神があなたを通してご自身の栄光を現わしてくださるのです。それが神が望んでおられることだから、そのように従ってゆくなら、私たちは確実に主の栄光を現わすことができるのです。パウロは、これはこの社会においても同じことが言えると言います。この世にあって、権威が与えられている人たち、その人たちに従ってゆきなさい、神がお立てになった上に立つ権威に従いなさいと。

◎「上に立つ権威に従うこと」に関して今からできること

それは「祈ること」です。四つのことを上げます。これらをあなたは今日から祈り始めることができます。みこころに沿って私たちは次のことを実践することができます。

- (1) **選挙においてみこころの人が選ばれるように祈る**：そして、選ばれた人はみこころの人であるというその結果を受け入れること。
- (2) **選ばれた人たちがみこころに沿った決断ができるように祈る**：
- (3) **彼らが救われること**：
- (4) **彼らが祝福を受けること**：彼らの上に祝福が与えられるようにと私たちは祈ってゆきます。

これらは、パウロが教えていることです。I テモテ 2：1-3 でパウロはこのような教えを与えています。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願ひ、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」、パウロは最初に「王とすべての高い地位にある人たちのために」と言いました。つまり、私たちが治めている人たちです。その人たちのために祈りなさいと言うのです。2節「それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」と、パウロはあなたがそのようにするなら、あなたには神からの祝福があると言います。3節には「そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。」とあり、もし、あなたがそのように上に立てられている人のために祈ってゆくなら、神が喜んでくださると言います。それ以上、何が必要ですか？上に立つ権威に従い、彼らのために祈ること、これが主が私たちに教えてくださる、主のみこころであり、主の命令です。

◎従順における例外

このようにあらゆることに従順が要求されていますが、確かに、その命令に背かなければならないときがあります。そのことを聖書は教えています。どのようなときでしょう？それは私たちの上に立つ者たちが、主のみこころに反することを私たちに命じるときです。そのとき、私たちはその命令に従いません。私たちの上に立つ者たちが、神の前に禁じられていること、みことばに反すること、みこころに反することを私たちに強要するとき、私たちはそれに従いません。そのように生きた人たちのことが、みことばの中にたくさん記されています。幾つかの例を見ましょう。

・シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ

ダニエルの三人の友人たちです。

王の命令：ダニエル書 3：5-6 「あなたがたが角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハーブ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝め。：6 ひれ伏して拝まない者はだれでも、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。」、これが王が出した命令です。これは主のみこころに沿った命令ですか？偶像崇拜を強要する命令です。

三人の取った選択：彼らはこの命令に背きました。3：12にこのように記されています。「ここに、あなたが任命してバビロン州の事務をつかさどらせたユダヤ人シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがおります。

王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みもいたしません。」これはこの三人を訴えたいと願っていた人たちのことばです。彼らには「我が意を得たり」でした。実際に、三人は火の燃える炉の中に投げ込まれました。この三人はネブカデネザル王にこのように言っています。3：16-18「…「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。：17 もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。：18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」と。炉の中に投げ込まれた三人はからだが燃えることもなかったのです。ネブカデネザルは三人を炉の中から引き出しました。そして、ネブカデネザル王はこのようなことを言っています。3：28「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。」と。彼らは王の命令を知っていましたが、それに従いませんでした。その命令は主のみこころに反するものだったからです。

・ダニエル

王の命令：ダリヨス王は次のような命令を出しました。ダニエル6：7「…すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。」と。これもダニエルのことを憎んでいた者たちが仕組んだわなでした。その王の命令に対して、**ダニエルの取った選択**：王の命令に背くという選択でした。6：10にこのように記されています。「ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。」明らかに、ダニエルは王の命令に背いたのです。そして、彼はこれまでと同じように、エルサレムに向かって真の神を覚えてその方に祈り、感謝し、礼拝をささげていたのです。そして、ご存じのように、彼はライオンの穴に投げ込まれました。しかし、神は彼を助け出されたのです。ダニエルが穴に投げ込まれて、その翌日、王が穴のところに行って来ました。心配で仕方がなかった王は生きていてくれることを期待しながらダニエルに語りかけます。そのときにダニエルはこのように王に答えています。6：21-22「…「王さま。永遠に生きられますように。：22 私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」と。このことばが私たちに明らかにしていることは、ダニエルはこの王に忠実に従って来たということです。王に逆らおうというような思いはありませんでした。彼はそのことを証しています。ただし、王であっても、神の命令に背くことを強要するなら、彼は神の命令に従うことを優先しました。新約の時代でもそうでした。

・使徒たち

議会の命令：議会は主イエス・キリストの弟子たちに対してこのような命令を与えました。使徒の働き5：28「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、…」、つまり、イエス・キリストの名によって、また、イエス・キリストのことを人々に教えるはならない、これが命令でした。

使徒たちの選択：使徒たちはこの議会の命令に背くという選択をしました。そして、議会の大祭司たちはこのように言っています。5：28「…何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに任せようとしているではないか。」と。

ですから、もうお分かりと思います。どの時代であっても、人々は自分の上に立てられた権威者に従順に従いました。ただし、彼らが神のみこころに反することを命じたときは、主の命令に従ったのです。そうして、彼らは神のみこころに従うことを実践していったのです。

2. この命令を与えた背景

さて、今日の学びをまとめるに当たって、ぜひ、次のことを覚えていただきたいと思います。なぜ、パウロはこのような命令をローマにいる人たちに与えたのか、なぜ、上に立つ権威に従うべきだと言ったのでしょうか？先に言いましたが、ローマ皇帝がみな良い皇帝ではなかったことは周知のことです。パウロがこの命令を人々に与えた背景です。

1) ローマにいるキリスト者たちに対する偏見

使徒の働き18章を見ると、非常に興味深いことが記されています。パウロはアテネを去ってコリントへと移動しました。アテネから南へと下ってコリントの町へ行ったのです。そこで、18：1-2にはこのように記されています。「その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。：2 ここで、アクラというポイント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、」と。「クラウデオ帝」とはローマ皇帝です。皇帝がローマからすべてのユダヤ人を追い出したのです。そのような命令を出したことがここに記されています。なぜ、彼らはローマを出なければならなかったの

でしょう？いったい、何が起こったのでしょうか。

ハワード・マーシャルという聖書学者は、歴史家スエトニウスのことばを引用して次のように説明します。「この暴動はキリストを宣べ伝えたことによって引き起こされた問題のことだと思われる。」と。この歴史家は第14代ローマ皇帝ハドリアヌスに仕えた人物です。紀元117年から138年まで君臨した皇帝です。スエトニウスは、キリストスの扇動が原因で、ローマのユダヤ人の間に暴動が起こったと言います。つまり、ローマにあって、クリスチャンたちがイエス・キリストを宣べ伝えたことによって、ユダヤ人社会に引き起こされた問題のことなのです。この歴史家はそのことを記しているのです。今、私たちはそれを使徒の働き18章で見たのです。興味深いことは、ローマ皇帝はユダヤ人を追い出しましたが、その中にクリスチャンたちもいたことです。というのは、皇帝にはユダヤ人もクリスチャンも区別がつかなかったのです。だから、ユダヤ人とともにクリスチャンも追い出されたのです。

2) ユダヤ人たちの問題

ローマにおいて、ユダヤ人たちがもたらした問題がいろいろありました。ローマはユダヤ人に非常に寛大な対応をしました。宗教的な様々な儀式をすることを許しました。ところが、ユダヤ人たちはローマに対して嫌悪感を抱いていたのです。そのために、機会あるごとにローマに刃向かっていました。自分たちがローマに支配されていることが面白くなかったのです。だから、福音書を見て私たちが何度も教えられることは、彼らはローマから自分たちを解放してくれる政治的な救世主を待っていたことです。イエス・キリストがその人物ではないかと、彼らは期待したのです。彼らが待望していたのは、このような政治的な解放者だったからです。ユダヤ人はいろいろなところで問題を起こしていました。

使徒の働き5章を見ると、そのことが記されています。すべての人に尊敬されている律法学者ガマリエルが議会の中で立って語ったことが記されています。5:34-36「ところが、すべての人に尊敬されている律法学者で、ガマリエルというパリサイ人が議会の中に立ち、使徒たちをしばらく外に出させるように命じた。:35 それから、議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん。この人々をどう扱うか、よく気をつけてください。:36 というのは、先ごろチウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどありましたが、結局、彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。」チウダという人物、彼も400人ほどの人々を扇動してローマに反旗を翻すのです。しかし、「彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。」とあるように、このようなことが起こったと聖書の中に記されています。

5:37を見ると「その後、人口調査のとき、ガリラヤ人ユダが立ち上がり、民衆をそそのかして反乱を起しましたが、自分は滅び、従った者たちもみな散らされてしまいました。」とあり、ユダという名が上がっています。先にも言ったように、ユダヤ人たちはローマの支配を面白く思っていないで、実は、熱心党というグループが存在したのです。彼らは極端な強硬派で、ローマの転覆を願ってローマへの攻撃を繰り返したのです。まさに、今で言う「テロリスト」の集団です。ローマはついに彼らをAD70年に滅ぼし、同時に、エルサレムも滅ぼすのです。37~100年くらいに生きたユダヤの歴史家ヨセフスは次のようなことを教えています。「ユダヤ人社会には、古代から、先祖たちの教えに基づく三つの哲学があった。」と、彼は「教え」のことを「哲学」と呼んでいます。「エッセネ人の哲学、サドカイ人の哲学、そして、パリサイ人の哲学」と、皆さんも何度も聞いておられる名前です。ヨセフスはこのように続けます。「哲学の第4の派として「熱心党」が存在している。」と。そして彼は言います。「ガリラヤ人ユダスが指導者となって作り上げた。」と。使徒5:37に出て来る「ガリラヤ人ユダ」のことです。この人物が「熱心党」という一つの派を始めたと言うのです。彼らはテロリストでした。ヨセフスはこのように記しています。「また、何人といえども、その人物を主と呼ぶべきでないという大義名分によって、ローマ皇帝を主と呼ぶ近親者や友人たちを襲って復讐することを平然と認めたのである。」と。ローマは皇帝は神だと人々に告白させました。熱心党の人たちは、自分の家族、友人たちでも、ローマ皇帝を神だと告白する者を全部殺したのです。そのようなことをやっていたのです。今も中近東ではそういったことが為されています。そうして、彼らはローマに反旗を翻したのです。

ですから、想像してみてください。ローマにあって、皇帝はユダヤ人とクリスチャンの違いも分からないから、全部追い出してしまいます。まして、ユダヤ人たちの中にはローマに反旗を翻して、偶像崇拜をする人たちを平気で殺すようなグループが存在していました。パウロがこれを記したときはこんな時代だったのです。こうして、当然、自分たちの周りにも、ローマにおいても、ローマ皇帝に従うなんて…という機運が高まって来ます。ローマに反旗を翻すことがあたかも正しいかのよう…。ゆえに、パウロはローマに対して、キリスト者はどのように接することが主の前に正しいのかを教える必要があったのです。そのような中でパウロは言うのです。「上に立てられた権威に従いなさい。」と。このような背景があったから、パウロは敢えて教えたのです。そのような人たちに、それがどのような人であっても、神が立てられた人だから、皇帝であってもあなたがたは従いなさい、それが神のみことろだと。

このメッセージを聞いた人たちにとっては衝撃的だったと思いませんか？パウロは何を言うのだろうか？と。しかし、それが神のみこころなのだと思います。

最初に話したように、神の栄光を現わすために私たちは生きています。イエス・キリストの救いをいただいた私たち一人ひとりが望んでいることは、神の栄光を現わすことです。神のすばらしさが世に証されてゆくことです。そのためには、神のみこころに従う以外にその方法はありません。あなたの思い通りに生きて神の栄光が現わされるか？いいえ、却って、神の栄光は汚されてしまいます。私たちに課せられていることは神のみことばに従うことです。神の命令に従うことです。そのときに神があなたを使って神の栄光を現わしてくださるのです。私たちにとって必要なことは、私たちの上に立つ人がどのような人であっても、主がお立てになった以上、私たちは正しい思いをもって、祈りをもって、彼らに従って行くことです。そのような人が今の世に必要なだと思いませんか？私たちが聞くのは批判ばかりです。もちろん、批判したくなるのが私たちの周りにはたくさん起こっています。しかし、みこころは「彼らに従いなさい」です。

どうでしょう？もし、教会が首相に対して「我々はあなたのために祈っています。主がお立てになった人であるゆえに、あなたのために祈っています。あなたの上に祝福があるように。」と、そのようなメッセージを送ったとしたら…。少なくとも、私たちがみことばから教えられることは、「それこそが神が私たちに望んでおられること」です。

3. この命令の対象

13：1は「人はみな、」ということばで始まっています。12：1は「そういうわけですから、兄弟たち。」と書かれています。呼びかけが違います。12：1はクリスチャンたちに対する教えでした。13：1は「人はみな、」とあり、この命令はクリスチャンだけでなく、すべての人が聞く教えなのです。なぜなら、これこそが神のみこころであるからと言うのです。

結論：

信仰者の皆さん、この社会にあって信仰者はどのように歩んで行くのか、そのことを学んで来ました。私たちは、主のみこころに従う以外に主を喜ばせることも、主の栄光を現わすことも絶対にできません。上に立つ権威に逆らうのではなく、従うことです。主のみこころだからそのように為すのです。

少なくとも、私たちは今日からこのようリーダーたちのために祈り始めて行くことができます。私たちがみこころに従わない限り、見て来たように、主の栄光は現わされません。私たち自身も、喜びに満たされることがありません。私たちがみこころに従って行くときに、少なくとも、私たちは主のみわがが為されることを期待できます。神はどのようにこの国においてみわがを為して行かれるのか？そのことを期待しながら生きて行くためにも、私たちは自ら、主によって与えられた命令を守る者であることです。この命令に従って行くことです。どうぞ、主によって立てられた権威に従い、彼らのために祈り支えて行く、そのような働き人として歩み続けてください。それが主が望んでおられることです。それが主のみこころです。

《考えましょう》

1. 我々の上に立つ権威者に従うことを邪魔するものを挙げてください。
2. みことばの教えに服従することが難しい理由は何だと思いませんか？
3. 主への感謝をもって、すべてのことを行なうためにはどうすれば良いと思いませんか？
あなたのアドバイスを挙げてください。